

---

# ORANGE

渋谷明日香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ORANGE

### 【コード】

N3306A

### 【作者名】

渋谷明日香

### 【あらすじ】

楓のうちで暮らしている、猫のアキは毎日親友のお出掛けするのが最近の趣味。今日も紅葉がきれいな山にいきます。猫の小さな恋を描いた、スローライフなオレンジ色の一日。

私の名前はアキ。人間でいうと16歳。青春真盛の日本猫。最近は親友のみるくとお出掛けするのが毎日の楽しみ。明日もまた、お出掛けする約束をしてきた。明日はどこへ行こうかな。それを考えるとすごく明日が恋しくなる。ああ、早く明日にならないかなあ。私はわくわくしながら目を閉じた。

翌朝。空はよく晴れて、明るい。私はあくびを一つして、リビンググに向かった。

「おはよう、アキちゃん」

私の飼い主、楓ちゃんが笑顔で云った。

「おはよう、みんな」

「おはよう」

とパパもママも続けて云った。

私は「にゃあん」と云ってみんなと同じ様に挨拶をして、椅子の上に飛び乗った。

私専用のその椅子に座るとママが「はい、どうぞ」と云って朝御飯をくれた。とても美味しそう。私は「いただきます」とお辞儀をして、ご飯を食べた。やっぱり美味しいかった。

それから私は牛乳を一杯飲んで、お出掛けの準備をした。ママの部屋にある大きな鏡で自分を見ながら毛なみを整えた。

うん、ばっちり。

私は満足して窓から外に出た。それから私は塀の上を歩いて、隣の家の子の青い屋根に飛び移った。風が髪に当たって気持ちいい。自然と気分がはずんで、鼻唄を歌ったりして待ち合わせ場所に行った。

「アキ、こつちだよお」

いつもの待ち合わせ場所に着くと、みるくが赤い屋根の自分の家から私を呼んだ。

「ごめん、遅れちゃったみたい」

私はそう云ってみるくの家に跳び移った。

「大丈夫だよ。ちょっとみたいものがあつたから先にきたんだ」

みるくはそう云って首を東に向けた。ちょうどそこにはオレンジに染まる山がある。こうようってやつだ。楓ちゃんが云っていた。

「こうようがきれいだねえ」

「でしょお、今日はあの山に行かない？」

「いいね、行こう」

私とみるくはそう云って山にお出掛けする事にした。

「ねえ、この鈴どう？」

「あ、すごいきれい。どうしたのお？」

「実はねえ、昨日茉奈ちゃんにもらったんだ」

「いいなあ、うらやましい」

「音もきれいなんだよ。でね、実はね、茉奈ちゃんがアキの分についても一つ買ってきてくれたの」

「本当に!?!いいのお？」

「うん! いつも仲良くしてる楓ちゃんのところのアキちゃんにあげて』って言ってたよ。だから帰りにうちに寄ってね」

「わかったあ。ありがとうね」

山に向かう間、二人でそんな会話をした。みるくの飼い主の茉奈ちゃんは楓ちゃんとも友達でよく鈴やりボンをあげたりもらったりしている。

ちなみに私たちの最近の流行りはキラキラ光る鈴で私は今3つ持っている。その中でもみるくの今つけている鈴は特にキラキラで音もすごくきれいだ。私も早くつけてみたい。楽しみがまた一つ増えた。

「あ、山が見えた。アキ、早くおいで」

しばらく話をしながら塀や、屋根を渡っているとみるくが私にそう云った。どいやら山についたみたいだ。

山はみるくの家から見たときよりもオレンジとか、赤とか、黄色にこうようしていた。地面も落ち葉でいっぱいになっている。踏むといい音がする。

私とみるくはしばらくその山で葉を拾ったりして遊んだ。

「おい。アキ、みるく」

しばらくした頃、私たちの通って来た塀から声が聞こえた。私が声の方向を見ると、そこには雄猫のリリイともみじが立っていた。

「あーリリイ！こっちだよ」

私の隣でみるくが飛び跳ねながら云った。みるくはリリイがとても好きで、リリイと会つと目をハートにして飛び跳ねる。リリイたちと私たちはほとんど毎日会って遊んでいるのに、みるくのこの癖は全く治る兆しが見えない。一種の恋の病なのかも。

「ねえ、リリイ。ちよつとあっちへ行こう」

みるくはリリイともみじが私たちのもとへくるとすぐにそう云ってリリイを誘った。リリイも「わかった」と一緒に山頂付近に歩いていった。

「二人きりになっちゃったね」

「う、うん…」

もみじにそう言われてすごく緊張した。

恥ずかしいからみるくには云ってないんだけど、実は私はもみじのことが少し気になっているからだ。

「どうしたの？顔、赤いよ？」

もみじは二人きりになって照れている私にを心配してそう云った。優しい…。

「大丈夫だよ。ありがとう」

私は何とか笑って返した。顔が熱くなるのを感じる。

「そっか、よかった」

もみじも笑った。私は何だか嬉しくなった。

「あ、そうそう。この葉っぱ知ってる？」

もみじが人の手の様な形のオレンジの葉っぱをくわえて云った。

「うつん、知らないよ。何てゆうの？」

私がそう聞き返すと、もみじは笑って云った。

「この葉っぱはね…もみじって云うんだよ！」

「本当にい！？すごい？」

私は驚いて云った。もみじは葉っぱの名前だったのか。

「ほら！みてみて」

もみじは口にくわえているもみじの葉を自分のお腹にあてた。ちょうどそこには葉っぱと同じ形の模様があった。

「あ、もみじだ！もみじにもみじがある」

「だからもみじって名前なんだよ！すごいでしょ」

もみじは得意気に云った。髭が揺れてかっこいい。

「ホントにすごいねえ」

私はそう云ってもみじのもみじを前足で触ってみた。フサフサで暖かい。

「ありがとお。ねえ、アキは何でアキって云うの？」

もみじが私の顔を除きこんで聞いた。私ともみじの距離は5センチ。ドキドキが速くなる。

「あ、え、つと…」

口がうまく回らない。

「…どうしたの？何か今日のアキ、変だよ？」

もみじはまた心配してくれた。

「そりゃあ、もみじと二人つきりで、こんなに近くにもみじがいたら緊張しちゃうよ」

とは云えるはずなかったので「全然、平気だよ！」と何とか云って笑った。

「なら、いいんだけどね。じゃあ、話して！アキは何でアキって云うのか」

そう云ってもみじは空を見上げた。やっと心臓がもとに戻った。

「あのね、私のお母さんがね、ナツって云う名前を楓ちゃんにつけてもらったの」

私も空を見上げて云った。

「うんうん。楓ちゃんってアキの飼い主さんだよな?」

もみじは空をみたまま、私に聞いた。

「そうだよ。それでね、私が産まれた時にナツの次はアキだって云ってつけてくれたんだよ」

私はそう云って、もみじのほうを見た。

「じゃあ、アキは季節の秋って意味なんだね」

もみじもそう云った後、私のほうに首を向けた。

その瞬間だった。私ともみじの距離は0センチ。鼻と鼻がくっついてしまった!

「ごめん…!」

私はとつさに云って、前足で鼻を押さえた。

「こつちもごめん…!」

もみじも同じように鼻を押さえて、謝った。

「うん。…ああ、びっくりした」

私はそう云って落ち着くためにゆっくり息をはいた。

「なんかドキドキした…かも」

もみじは頬を赤らめて、云った。

「あ、もみじ、顔赤いよお。大丈夫?」

私は冗談っぽく笑いながら云った。

「アキだって赤いよ!どうしたあ?」

もみじも笑って云った。

「何でもないよ〜!ちょっと暑いのみ!」

私ともみじは、そんなふうじに日が傾くまで笑いあった。その時間は、何だかすごく短く感じた。楽しい時間は早く過ぎるって、楓ちゃんが云ってた。このことなんだな。

日は既に西に沈みかけ、町中をオレンジに染めはじめた時、もみじが突然、云った。

「ねえ、知ってる？もみじって葉っぱはね、秋になってオレンジ色に染まるときが一番きれいなんだよ」

もみじの顔は夕日のせいかさつきより赤くなっている。

「だからね、アキはもみじにとって、すごい大切なの」

私はその言葉をしばらく理解できずにいた。秋って季節？それとも…。

「もしかして、アキって……いや、そんなわけないよね。何でもない」

私は心の隅にあった期待を掻き消すように首を振ったが、もみじは期待通りのことを云ってくれた。

「そんなわけあるよ。アキって、季節じゃなくて、今俺の目の前にいる、猫のことだよ」

もみじがそう云い終えた瞬間、私は喜びで倒れそうになった。

「もみじ、ホントに云ってる？」

私は確認の為に聞いた。するともみじは、笑って云ってくれた。

「ホントの気持ちだよ。アキが大切、だれにも渡したくないよ」

私の目には涙が浮かんできた。

「ありがとう…私もだよ…」

そう云って私はもみじに寄り添った。

それから10分後。山の上からみるくの声が聞こえてきた。

「おい、そろそろ帰ろお」

私たちは口を揃えて「そうしよう」と云った。

「今日はありがとう。じゃあ、またね」

もみじは私にそう云って、リリイのもとへ走っていった。それと同じにみるくがこっちへくる。

「じゃあ、帰ろっか」

みるくは笑って云った。

「うん」

私も笑って云った。



「そうそう、あたしの家に寄って鈴、持って帰ってね」

「うん！もちろん、ホントにありがとう」

「それは茉奈ちゃんに云ってよ」

「あ、そうだね」

私とみるくはそんな会話をして家に戻った。

「ちよつと待ってて。確か机の上に…」

みるくは茉奈ちゃんの部屋の机の上に飛び乗って、鈴を探した。

「あった、あった」

すぐにみるくは小さな紙の袋をくわえて窓に戻ってきた。

「はい、どうぞお」

私はみるくから鈴を受けとってお礼を云った。

「ありがとう。茉奈ちゃんにも云っておいてね」

「うん、わかったよ！じゃあ、また明日、お出掛けしようね」

みるくは笑顔で云った。

「うん、ばいばい」

私も笑顔で云って、家の方向を向いた時、

「ねえ」

と私とみるくが同時に云った。私は、ふともみじのことを話しておこうと思ったのだけど、みるくは何を話すのだろう？

「なあに？みるく」

「アキから云って」

そう云われたがいざ云うとなると恥ずかしくなったので「私はみるくが云わなきや云わないよお」と云った。

「あ、ずるい。じゃあ、云うよ？」

みるくは微笑んで云った。

「今日ね、リリイと二人つきりになったときに、リリイから好きって云ってくれたの！」みるくはとても嬉しそうに云った。その表情は雌の私が見てもかわいいと思う笑顔だった。

「そうなんだあ、ホントによかったねえ」

私も負けずに笑った。かわいいかな？

「うん、よかった！アキの話はなに？」

「私の話はねえ…、みるくと同じ！」

私は頬を赤くして云った。

「え…？意味わかんないよお」

みるくは困った顔で云った。

「あのね、私はもみじに好きって云われた！」

私は少し大きい声で云った。

「え…！じゃあ、あたしたち、同じことしてたってことお？」

「そうみたいだねえ！なんかすごいよね」

「うん！それじゃあ、明日はダブルデートだね」

「そうだね。それじゃあ、ばいばい」

「ばいばい」

今度こそ私は自分の家の方向に向いて歩きだした。

家に着いてから、みるくにもらった小さい紙の袋を開けると、中からは夕日を反射してオレンジ色に光るきれいな鈴がきれいな音色を奏でていた。

明日はこれをつけて、もみじと一緒ににお出掛けしよう。  
そう考えるとまた明日が恋しくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3306a/>

---

ORANGE

2010年12月28日22時58分発行